

## 古狂言本の待遇表現形式「オ～ヤル」と「～ヤル」

坂口, 至  
熊本大学文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/15483>

---

出版情報 : 文献探究. 23, pp.10-17, 1989-03-20. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :



# 古狂言本の待遇表現形式「オゝヤル」と「くヤル」

坂口 五五

はじめに

言語資料としての狂言の研究を、どのような目的のために、どのような方法で行うか。研究者によって考えは様々であるが、最も豊かな成果が期待できるのは、中世後期から近世にかけての口語、とりわけ、キリシタン資料や朝鮮資料などによって多くのことが明らかにされている中世末期の口語と、近松の世話物浄瑠璃や歌舞伎狂言本などで多くのことが明らかにされている元禄・享保期の口語のはざまにあって、暗い谷間のように不分明な十七世紀の口語の実態の解明であると考え。筆者は、この狂言資料による十七世紀口語の記述を第一の目標としている。そして、方法的には、この時期に成立したと考えられる諸台本を、流派の別、成立時期の明確・不明確に拘わらず、できるだけ広く見渡して、台本ごとの個別的現象の中から、真の口語の流れを浮かび上げようとする行き方を取りたいと思う。

一

本稿では、右の目的と方法の一実践として、中世末から近世にか

けての口語にしばしば現れる待遇表現形式「オゝヤル」と「くヤル」(く部分は動詞・助動詞の連用形)を取り上げ、前者から後者に変化して行った過程とその要因を、古狂言資料をもとにやや細かく追求してみたいと思う。

まず、ここで用いる古狂言資料を、ほぼ成立年代順に挙げておく。①『祝本狂言集』(流派・成立時期・著者とも不明。慶長・寛永頃成立か)く永井猛「『祝本狂言集』―翻刻と解説」(『能楽研究』一二、昭六二・三)による。

②和泉流『天理本』(寛永・正保頃成立、著者不詳)く天理善本叢書の影印による。

③大藏流『虎明本』(寛永十九年、一六四二成立)く池田広司・北原保雄編『大藏虎明本狂言集の研究本文編』により、大藏弥太郎編『大藏家伝之書古本能狂言』の影印を参照。

④大藏流『虎清本』(正保三年、一六四六成立)く『狂言古本二種』(わんや書店)の翻刻により、『近代語研究』三の影印を参照。

⑤和泉流『和泉家古本』(承応・元禄頃成立、山脇和泉元信著)く日本庶民文化史料集成『狂言』の翻刻による。

⑥『狂言記正篇』(万治三年、一六六〇成立、流派・著者とも不明)く北原保雄・大倉浩編『狂言記の研究』の影印・翻刻による。

⑦鷺流『延宝忠政本』(延宝六年、一六七八成立)く田口和夫「鷺

流狂言『延宝・忠政本』翻刻・解説」(「静岡英和女学院短大紀要」一一、昭五四・三)の翻刻による。

⑧『狂言記外五十番(外篇)』(元禄十三年、一七〇〇成立、流派・著者とも不明)と有朋堂文庫の翻刻による。

⑨『統狂言記』(元禄十三年、一七〇〇成立、流派・著者とも不明)と北原保雄・小林賢次編『統狂言記の研究』の影印・翻刻による。

次に、待遇表現形式「オ〜ヤル」と「〜ヤル」に関する主要な先行研究は、次のようなものである。

文献Ⅰ 湯沢幸吉郎『室町時代言語の研究』(昭四〇)

文献Ⅱ 同 『徳川時代言語の研究』(昭一〇)

文献Ⅲ 山崎久之『国語待遇表現体系の研究』(昭三八)

文献Ⅳ 同 『「お」ある』『「お」やる』『やる』の変遷―

近世待遇語の変化の傾向―』(昭四〇)

この他にも、概説書等でこれらの言語形式に触れたものも多いが、いずれもこれらの文献で指摘された以上に出ていないと思われるので、省略する。

これらの文献で明らかにされた事実は、次のようなことである。

(1) 抄物資料では「オ〜アル」が支配的で、「オ〜ヤル」も見られる。(文献Ⅰ)

(2) キリシタン資料では「オ〜アル」と「オ〜ヤル」が共によく用いられる。ただ、ロドリゲス『日本大文典』には「〜アル」の形も示されている。(文献Ⅳ)

(3) 狂言資料(『虎明本』)では「オ〜ヤル」が多く、「〜ヤル」も見られる。(文献Ⅲ、Ⅳ)

(4) 同じく狂言資料で、「お」で始まる語(「置く」・「思う」など)の場合は、「〜ヤル」専用である。(同)

(5) 同じく狂言資料で、「オ〜アル」は「オ〜ヤル」や「〜ヤル」

より待遇度が高い。「オ〜ヤル」と「〜ヤル」の待遇度の違いは、前者が高い場合と、同じと考えられる場合とがある。(同)

(6) 元禄と享保期の世話物浄瑠璃や歌舞伎狂言本の資料では、「〜ヤル」が支配的である。「オ〜ヤル」は、武士や老人のことに限定される傾向にある。(文献Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ)

従って本稿では、これらのうち、山崎久之氏が『虎明本』の検討によって得られた(3)と(5)の傾向を、『虎明本』も含めた諸台本で検討し直すこと、更に山崎氏の言及のない「オ〜ヤル」から「〜ヤル」への変化の要因を探ることが目標となる。

## 二

まずは、事実の提示から。次ページの(表1)は、九種の狂言資料における「オ〜ヤル」と「〜ヤル」の出現状況を一覧したものである。「オ〜アル」は出現頻度が極端に低く、山崎氏の指摘(5)に付け加えることが無いので省略する。また、待遇語「おしやる(言う)」「おぢやる」「おりやる」の三語は、言うまでもなく除外する。

一見して、由来の明確な大蔵流と和泉流は新形「〜ヤル」の比率が低く(驚流『忠政本』もこれに準じる)、何流とも詳らかでない『祝本』と『狂言記』各篇は、「〜ヤル」の比率の高いことが判る。また、和泉流が大蔵流よりも新形「〜ヤル」の比率が低いこと、『狂言記』の中では外篇が最も旧形「オ〜ヤル」の比率の高いことも注意しておきたい。なお、語頭に「お」を含むものはすべて「〜ヤル」となっており、先述の(4)が確認できたことになる。

〈表1〉

| 資料名   | 曲数  | 語頭に「お」をもたないもの |     | 語頭が「お」 |     |
|-------|-----|---------------|-----|--------|-----|
|       |     | オ〜ヤル          | 〜ヤル | 〜ヤル    | 〜ヤル |
| 祝本    | 23  | 16            | 6   | 28・6%  | 0   |
| 天理本   | 227 | 202           | 3   | 1・5%   | 0   |
| 虎明本   | 237 | 310           | 28  | 8・3%   | 0   |
| 虎清本   | 8   | 29            | 2   | 6・5%   | 0   |
| 狂言記正篇 | 50  | 28            | 67  | 70・5%  | 0   |
| 和泉家古本 | 221 | 139           | 6   | 4・1%   | 20  |
| 忠政本   | 25  | 32            | 1   | 3・0%   | 0   |
| 狂言記外篇 | 50  | 20            | 6   | 23・1%  | 0   |
| 統狂言記  | 50  | 33            | 63  | 65・6%  | 0   |
|       |     |               |     |        | 6   |

注 歌謡・語りなどの中の用例は除く

以下、各台本ごとに特徴を記述して行こう。

最初に、山崎氏も資料とされた大蔵流『虎明本』から検討するが、具体的に見て行く前に、そもそもこの「オ〜ヤル」から「〜ヤル」への変遷が、形態的・内容的にいかなる特徴をもつかを考えるならば、変遷過程そのものがあらかじめ予想できなくてはならないであろう。

その第一は、形態上「〜ヤル」が「オ〜ヤル」からの「オ」の脱落であり、それは動詞・助動詞を含む全体の言語形式の拍数が、一つ減ったことを意味するから、「オ〜ヤル」の拍数が少なければ少ない程、「オ」の脱落による語形の不安定さが増し、それを避けようとする力が働きやすいのではないか、逆に拍数が多い程「オ」の脱落を許容しやすいのではないかと想像されるのである。

第二に、内容的にこれらの言語形式が待遇語であることである。

山崎氏が注目されたのはこの点であり、それは基本的に正しかった。もっともその矢は充分には的を射なかったと思われるが。

第三には、「オ〜ヤル」から「〜ヤル」への変化は、前述の(4)に明らかかなように語頭に「お」をもつ動詞から始まったという事実である。これは言うまでもなく「オ」の重複を嫌ったからであるが、その背景には中世末期前後の「オ」の音価が「o」でなく「oo」であったことが影響している筈である。そうであれば、次に変化の波をかぶるのは、これと同じ音声環境が、違った話線上の位置に現れる場合であろう。

さて、『虎明本』の実態であるが、「〜ヤル」は全部で二八例に過ぎないので、面倒でも総て列挙することにしよう。かつこ内は該当する動詞、翻刻本の巻・ページ数、下は話し手と聞き手、へ内は動作主(聞き手と同一でない場合)を示す。

※あふ中々、これをみやれ(見る、上81) すっぱ↓冠者  
 ※今がてんがいてわかうなりやりたがるは(成る、上109)

孫↓孫 〈祖父〉

※おしやる事をききやれ、(聞く、上109) 孫↓孫

※どろをふみやつたが、(踏む、上111) 孫↓孫 〈祖父〉

※むちで打た、きやらうほどに、(打ち叩く、上224) 冠者

↓新参者 〈主〉

※もつた程に、もつてくりやれといふ事じや(呉るる、上280)

大名↓通行人

※たのふだ人はさぞわめきやらふなふ(喚く、上306) 武悪

↓冠者 〈主〉

※それがしにわごりよをいひつきやつたらは、(言い付くる、上

309) 武悪↓冠者 〈主〉

※まづこらやれと云て、(堪ゆる、上359) 妻↓婢・舅

※そなたのとは、どこへいきやつたぞ（行く、中39） 鬼↓  
女（夫）

※かまひておそうもどりやつたらは、（戻る、中109） 主↓  
冠者

※身共をたすきやつたらは、（助くる、中127） 冠者↓某

※命をたすきやれ（助くる、中127） 冠者↓某

※目をつぶしやつたものであらふ（潰す、中194） 妻↓夫

（地藏）

※きけは殿達の、人をかゝやると云程に、（雇ゆる、中225）

祖父↓孫（殿達）

※いとまをくりやれ（呉る、中238） 妻↓夫

※何なり共ほしひ物を取いだしやれ、（取り出だす、中239）

夫↓妻

※たち刀馬くらをとらしやるときひたれども、（取らす、中2

70） 女↓兄（殿達）

※在所へひけいしてうつてくりやれ（呉る、中277） 伯母

↓甥

※たて、しんじやれ（進ずる、中284） 夫↓妻

※しゅじやうお、ふあつらやつたれ共、（詠ゆる、中340）

夫↓僧（僧達）

※まん中でうちたをさりやつた、（打ち倒さるる、中351）

僧↓所の者

※お仏をみしやれ（見する、中356） すっぱ↓所の者

※そなたは善光寺へ参りやりさうななりじや（参る、中404）

僧↓僧

※人のききやつたらはわらやらふが（聞く、下111） 兄↓弟

（人）

※人のききやつたらはわらやらふが（笑う、下111） 兄↓弟  
（人）

※これみやれ左になにもなひは（見る、下145） 亭主↓占い  
※是みやれ、（見る、下146） 亭主↓占い

これらの用例のうち、第一、三、四例などは、文法的には助詞「を」の省略で「オウヤル」の用例とも取れないこともないが、『虎明本』では助詞「を」を省略することは滅多になく、また「オウヤル」の「オ」を「を」と表記することもほとんどないから、その可能性を考える必要はないであろう。

この28例から、どのような事実が見て取れるか。直ちに気付くのは、「ウヤル」の直前に助詞「を」が来ている場合が多い（12例、四割強）ことである。先に、「お」を語頭にもつ動詞とは違つた話線上の位置における「オ」の連続を予想したが、これがまさにそれに該当する。ちなみに「オウヤル」の場合を調べてみると、310例のうち助詞「を」が前に来ているのは31例で、ちょうど一割でしかない。つまりは、助詞「を」と、「オウヤル」の「オ」の「ow」音連続の発音にくさを避ける形で、「オ」が脱落しやすくなつたのであろう。もちろん、息継ぎの関係で、連続的な発音でなくなる場合もあるはずだから、法則的ではないのは当然である。なお、「ウヤル」の直前に、「若う」「遅う」「多う」といった才段長音が位置しているものが3例あるが、これらも「を」に準じて考えてよいかも知れない。

次に、第三者の動作の場合に、比較的「オ」が脱落しやすいといふことである（10例、35%強）。ちなみに「オウヤル」では、第三者の場合は38例で、12%強と低い。これは、やはり待遇表現に関わる問題で、聞き手待遇に比べ、第三者待遇の方が、当事者が眼前に居ないだけ気楽であり、「オ」を落とすことに抵抗が少な

かったということであろう。とすれば、この場合、「オゝヤル」と「ゝヤル」の間に待過度の差が考えられることになる。しかし、山崎氏が(5)で示されたような聞き手待遇の場合の差は、筆者の調査では判然とせず、明らかな傾向はこの第三者待遇に限られる。ということとは、「オゝヤル」と「ゝヤル」の待過度の差は、あったとしてもごく小さなものだったと考えてよいだろう。

次に、「オゝヤル」全体の拍数の問題であるが、拍数の少ない方(四、五拍)は、「ゝヤル」の用例が少ないこともあって、傾向がつかみにくい方が、多い方では八拍1例(打ち倒さるる)、七拍2例(打ち叩く・取り出だす)、六拍2例(言い付くる・詠ゆる)が「ゝヤル」となっており、「オゝヤル」の場合、六拍8例(言い付くる・心得る4・患う・寛ぐ・たしなむ)のみで、七拍、八拍の用例がない。やはり、拍数が多くなれば「オ」を落とすことが多いと言えようである。

以上三つの要因を考えたが、実際には見ての通りそれらの二つ以上が重なっている用例が多く、どれが最優先かを決めるのは困難である。

これら三つのうち二つは、発音の容易化、労力の軽減が要因と考えられ、言語変化の典型的要因がこの現象にも現れたと言えよう。

なお、言語変化の過程においては、男女・身分などの位相が関係することがあるが、この『虎明本』ではそこまで細かく明らかにすることは出来ない。

さて、大蔵流の次の資料は『虎清本』であるが、周知のようにならずか8曲しかなく、「ゝヤル」も次の2例に止どまる。

※いまがてんがいて。わかうなりやりたがるは(成る、48上)

孫↓孫 (祖父)

※としよつてどろをふみやつたが。(踏む、49下) 孫↓孫

(祖父)

現象的には、「ゝヤル」の前が助詞「を」とそれに準ずるものであり、『虎明本』で考えた要因で説明できるが、何分用例が少ないので明確なことは言えない。なおこれらは、『虎明本』の第二、第四用例と全く同じ部分(「薬水」という曲の中)である。

### 三

次に、和泉流の二本、鷲流一本を検討する。

まず和泉流『天理本』は、調査したすべての資料のなかで、新形「ゝヤル」の比率が最も低いのが著しい特徴である。この本は、何かにつけ、ほぼ同時代の大蔵流『虎明本』と比較されるが、この言語現象でもやはり、『虎明本』より一層古い状態を反映していると言える。「ゝヤル」の用例は、次の3例である。

※こなたへ・とをりやれト云(通る、上199) 亭主↓僧

※そなたの・かしやつたればこそ。(貸す、下130) 所の者

↓所の者

※きぬをとりやらうかト云(取る、下406) 夫↓妻

用例が少なく、確実なことは何も言えない。

次に『和泉家古本』。「ゝヤル」の用例は次の6例である。

※なんのうそをつきやりましたト云(付く、38上) 妻↓夫

(舅)

※おなもあを梅をすきやりますト云(好く、39上) 夫↓舅

(妻)

※髪をもみやれト云(揉む、102上) 僧↓所の者

※こちをみやるなト云テ、(見る、104上) 僧↓所の者

※あれをこみつきやれ(込み付くる、186上) 主↓所の者

※今度はかみさまかな打こましやらうそト云(打ち込ます、18

6上) 冠者↓主

ここでは、明らかに「くヤル」の直前が助詞「を」の場合に、多く「オ」が脱落している。最後の一例は、拍数が多いための脱落である。すなわち、『虎明本』で推測した三つの要因が、この本によって確実になったと言つてよいだろう。

次は驚流『忠政本』。「くヤル」はわずか一例である。

※舟ちん(ノ事ニハアレヲミヤレ。) 船頭↓僧

かつこは、書き入れの部分を示す。助詞「を」は偶然であろうか。

#### 四

最後に、流派・成立事情など不明な点が多い『祝本狂言集』と『狂言記』のうちの三本を検討する。

『祝本狂言集』は最近発見されたもので、内容的には『天正狂言本』よりは新しく、『天理本』や『虎明本』よりは古い資料ではないかと推定されている(①の解説参照)。言語上も、確かに『天理本』や『虎明本』よりも古いのではないかと思わせる部分がある。表記の上から最も特徴的なのは、促音の無表記がまま見られることである。

\*やすくねぎてまけぬ所で(値切る、120下、ト書き)

\*そんじやうそこゑみなな咄におじやた時、そなたもおじやたをおぼやたか(来る、覚ゆる133下)

促音の無表記は近世の他の諸本にはほとんど見られず、表記史的に

も十七世紀後半以降の資料に現れることのまず無いものである。

また、文法的には、この前後「ヨ」から「イ」への過渡期にある下二段などの動詞・助動詞の命令形語尾でも、旧形「ヨ」の割合が十七世紀の狂言資料の中では最も高い(これについては、近刊の奥村三雄教授退官記念『国語学論叢』の拙稿においてやや詳しく述べた)。

その一方で、待遇語に関して「ゴザアル」や「マラスル」はほとんど見られず、それらの新形「ゴザル」や「マスル」が支配的であること、また二段活用の一段化が進みつつあることなど、『天理本』や『虎明本』などより新しい言語を反映している点も多く、大変興味のある資料である。

さて、「くヤル」の用例は、次の6例である。

※又とぶ所で、「はまりやるな」といふて、(嵌まる、121下) 所の者↓僧

※「はまりやるなといふがわるいか」といふ。(嵌まる。121下) 下の者↓僧

※こ、までおじやつてもどりやるものか。(戻る、121下) 所の者↓僧

※おかしい事があらばいふてわらやれ。(笑う、122上) 所の者↓僧

※あまつさへぶすをみなになしやつた。(成す、126下) 冠者↓冠者

※いや、先まぢや。(待つ、137上) 冠者↓すっぱ

ここでは、『虎明本』で考えた三つの要因は当て嵌まらないようである。最後の命令形語尾「レ」を落とす例など、次の『狂言記』を彷彿させるところがあり、その点も興味深い。

次に『狂言記』を成立順に検討する。

まず正篇から。新形「ゝヤル」の割合が十七世紀の狂言資料中最も高いことは、正篇が言語的に最も近世的だと言われる所を裏付けていると言えよう。

「ゝヤル」の用例が多いので、具体例の提示は省略するが、先に『虎明本』で見た三つの要因の中で、この資料にも当て嵌まるのは、拍数の多いものほど新形「ゝヤル」が現れやすいことである。  
 〈表2〉は、拍数（「オゝヤル」で計算）ごとの「オゝヤル」と「ゝヤル」の現れ方を数値化したものである。

〈表2〉

| 拍数 | オゝヤル | ゝヤル |
|----|------|-----|
| 四  | 22   | 41  |
| 五  | 6    | 19  |
| 六  |      | 7   |

「オゝヤル」では四拍の占める割合が78・6%であるのに対し、「ゝヤル」では61・2%で、拍数が少ないほど「オゝヤル」が現れやすく、六拍となるものは「オゝヤル」になく「ゝヤル」のみとなっていて、拍数が多くなれば「ゝヤル」が出やすいということが読み取れる。なお、その他の助詞「を」が前置される場合や、待遇上の傾向は特に認められない。

次に、外五十番（外篇）。この資料の『狂言記』内に占める独自の位置、すなわち成立時期の割に古い言語を反映していること（例えば助動詞「マラスル」の残存）についてはつとに指摘されているところ（亀井孝「狂言のことば」など）であるが、この待遇表現形

式においてもその例に漏れない。つまり、新形「ゝヤル」の割合は他の正篇や続篇に比べて非常に低いのである。「ゝヤル」の用例は次の6例である。なお、底本にしたのは不正確な翻刻本であるが、この現象に関する限り支障はないであろう。

慶

※まだ云やるかいの。（言う、315） 所の者↓僧

※持て来て見しやれ。（見する、449） 男↓聲

※その伯父御を見知ってゐやるか。（居る、477） すっぱ↓

冠者

※その様なこと云やる。（言う、480） すっぱ↓冠者

※あたをしやるげな。（為る、480） 冠者↓すっぱ 〈人〉  
 用例が少ないので、特に傾向らしいものはつかめない。

最後に、続篇を検討する。「ゝヤル」の用例が比較的多いので、正篇同様に、拍数の多少による傾向を見てみよう。

〈表3〉

| 拍数 | オゝヤル | ゝヤル |
|----|------|-----|
| 四  | 23   | 44  |
| 五  | 9    | 17  |
| 六  | 1    | 2   |

四拍における「オゝヤル」と「ゝヤル」の比率は、それぞれ69・7%、69・8%と拮抗しており、他に特記すべきこともない。この資料では、拍数はもはや大して意味を持たないようである。また、他の要因も関係していないようである。



まとめ

以上、十七世紀の狂言本諸資料をもとに、待遇表現形式「オ〜ヤル」と「〜ヤル」について、前者から後者への変遷の状況と、それを招来した要因について考察を進めて来た。各資料の実態については繰り返さないが、変遷の要因について再度まとめると、

- 1 「オ〜ヤル」の直前の音が「オ」(「ow」)かそれに準じるものの場合に「オ」が脱落しやすい。
- 2 「オ〜ヤル」の拍数が多いものほど「オ」が脱落しやすい。
- 3 聞き手待遇の場合より第三者待遇の場合の方が「オ」が脱落しやすい。

ということが、すべての資料に共通するわけではないが、傾向として現れていることが明らかになったと思う。

しかし、これらを中世末期のキリシタン資料などと、元禄享保頃の世話物浄瑠璃や歌舞伎狂言本などとの間に位置させてみると、必ずしも口語の流れがスムーズに浮かび上がったとは言えないようである。前者のうち特に『ロドリゲス大文典』に見られる「オ〜ヤル」と「〜ヤル」の併存(待遇価値も違っていたらしい)の記述と『天草版平家物語』などの実態との間の齟齬、また後者の「オ〜ヤル」の位相の問題など、狂言資料が寄与できなかった部分も多い。

しかし、筆者は、想像を逞しくして、文献資料から得られる口語の流れを、少なくとも二通りに考えることによって、これらの実態を説明できるのではないかと考えているところである。すなわち、キリシタン資料のうち『天草版平家物語』などから大蔵流・和泉流など正統な狂言資料を経て、近世中期に至るみちすじと、『ロドリゲス大文典』の「〜ヤル」(ちなみに、朝鮮資料の『捷解新語』

に「〜ヤル」の用例のあることを付け加えておく)から『祝本狂言集』や『狂言記』各篇を経て、近世中期に至るみちすじである。前者のみちすじは、上流階級の典雅なことばの流れを表し、後者のみちすじは、庶民階級の日常的なことばの流れを表しているのではない。あまりに先走っていることは承知している。今後、さらに多くの言語現象によって、検討を積み重ねて行き、真相に迫りたいと思っている。

なお、狂言の言語が伝承言語という側面を持っている以上、十七世紀のことはを考える時、十八世紀以降の資料も参考とすべきことは言うまでもない。今回は時間の都合で全く言及できなかったが、例によって瞥見の限りでは、流派ごとの伝承に興味深い点がある(例えば、十八世紀末期の大蔵流『虎寛本』では、『虎明本』などで一旦部分的に採用した新形「〜ヤル」を捨て、旧形に復していることなど)ものの、今回検討して得たものに新たに加えうる知見はほとんどなさそうである。

— 熊本大学文学部助教授 —